2009－3

Sakkyo Club

札響くらぶ

No. 46

発行／札響くらぶ(財)札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番地15号(札幌コンサートホール内)
HPアドレス　http://members3.jcom.home.ne.jp/sakkyoclub/index.html
Eメール　sakkyoclubmail@yahoo.co.jp

09.4～10.3　定期演奏会の見どころ・聴きどころ
尾高音楽監督にプログラムの解説をしていただきました

毎年、オーケストラとしての幅広いレパートリーをたくさんの方に聴いていただこうと、出演の皆さんや事務局との話し合いを行い、このようなプログラムが生まれています。今年度の特徴は、それぞれの人が自ら希望する曲を取り上げているという点です。これをとりあげなくてはいけないという曲ではなく、高関さんも私も、取り組みたくてたまらなかった曲をプログラムしました。それぞれが特徴を出すだけではなく、自分のレパートリーとして得意にしている曲を選定し、それでいてバランスが取れている構成になっています。

■第518回定期演奏会
4月17日(金)19：00
18日(土)15：00
指揮：ラドミル・エリシュカ
(首席客演指揮者)
ヴァイオリン：木嶋真優
曲目：ヤナーチェク／
組曲「利口な女狐の物語」
モーツァルト／
ヴァイオリン協奏曲第3番
ドヴォルジャーク／
交響曲第7番

4月はエリシュカ先生です。

先生は指揮されるたびにいろいろな名演を残してくれています。最近、札響だけではなく国内のいろいろなオーケストラと協演なさっていますが、相性という面では札響が一番いいようです。評論家やプレーヤーの皆さんからも「札響と演奏したときが1番良い」という声を聞きますし、エリシュカ先生も札響をとても気に入ってくれていますね。ドヴォルジャークの7番は、これまでにも札響はいろいろな指揮者の方と演奏しておりそれぞれ良かったのですが、今回はチェコ・ドヴォルジャーク協会の会長のエリシュカさんによる正調の演奏を聴くことができることになります。これはかなり違うのですよ。例えば「新世界より」でも、チェコの指揮者だと折り目正しい演奏となるわけです。実に質素でそれでいて音楽のよさが聴こえてくるという、そういう演奏は本場の人だから出来ることでしょう。札響がこれまでにエリシュカさんから得たものの上に、この7番が加わってくることとなりますね。ヤナーチェクは、もっと演奏した方がいいと思っている作曲家です。とても面白さが多いのです。ヤナーチェクは、チェコの中でもドヴォルジャークやスメタナとは違う地方の作曲家で、言語も違うし、そのせいでリズム感も違う。エリシュカさんは、その真っ只中にいらっしゃる人で、2つの違いをこの人ほど明快に描き分けられる人はいないと思います。協奏曲はモーツァルトです。モーツァルトはザルツブルク生まれの人ですが、本当に成功したのはプラハであってチェコをとても気に入っていた。プラハが彼を認めてくれたから、そしてプラハの人は音楽的であるから嬉しかったのですね。ヤナーチェクとドヴォルジャークを結び付けるモーツァルトとなっていてとてもいいと思います。独奏の木嶋さんは、僕は共演したことが無いのですが、多くの方が圧倒的に絶賛する人です。この若い木嶋さんと、年齢差がかなりあるエリシュカ先生との演奏はフレッシュなものになるのではないでしょうか。

■第519回定期演奏会
5月29日(金)19：00
30日(土)15：00
指揮：尾高忠明（音楽監督）
チェロ：石川祐支
(札響首席奏者)
ヴィオラ：廣狩　亮
(札響首席奏者)
曲目：モーツァルト／
交響曲第41番「ジュピター」
R・シュトラウス／
交響詩「ドン・キホーテ」

5月は僕です。

実は僕は昔、リヒャルト・シュトラウス協会から「そんなに演奏していただいて」と感謝されたくらいに、毎回のようにR・シュトラウスをとりあげていました。年とともに少し減ってきましたが、今年はPMFで「英雄の生涯」を、定期ではこの「ドン・キホーテ」を取り上げることになります。やはりすごい作曲家だなと思います。「ドン・キホーテ」はチェロの大変なソロがあって、以前からプロ

グラムに入れたいとは思っていましたが、想定していたソリストとの調整などうまくいかず入れられずにいました。どうしてもやりたいと頭を悩ませていた時に、石川祐支君が定期演奏会（2007年２月）でショスタコーヴィチをすばらしく弾いてくれて、「そうだ彼をソリストに」と思いつきました。石川君も「とてもやりたい」と言ってくれたし、札響がとてもすごいと思うところは廣狩君というすばらしいヴィオラ首席もいるところです。自分たちの首席奏者たちをソリストに「ドン・キホーテ」ができるオーケストラはそうは無いですから、札響もここまで来たか、と思っていただける方は国内にも多いと思います。このときのコンサートマスターは三上君です。２人のソリストとコンマス、三者のつばぜり合いが今から本当に楽しみで、よい結果になると信じています。

■第520回定期演奏会
６月12日(金)19：00
13日(土)15：00
指揮：高関　健（正指揮者）
ソプラノ：針生美智子
テノール：高橋　淳
バリトン：堀内康雄
合唱：札響合唱団、札幌アカデミー合唱団、HBC少年少女合唱団
曲目：メンデルスゾーン／交響曲第４番「イタリア」
オルフ／「カルミナ・ブラーナ」

６月です。

「カルミナ・ブラーナ」を振りたい指揮者はたくさんいらっしゃいますね。高関さんがそう思うようになったのは結構遅くなってからで、ベルリンでドイツのコーラスが歌っているのを聴くうちに面白いと思うようになって勉強したとおっしゃっていました。日本の指揮者はテクニックのしっかりしている人が多いですが、特に高関さんがこういうリズムの難しいものをしっかり振って下さって、「ピーター・グライムズ」を経ていま脂がのってきている合唱団が、どこまで挑戦してくれるのか楽しみです。独唱の高橋さん、堀内さん、針生さんはみんな素晴らしい人です。針生さん、堀内さんは北海道ゆかりでみなさんご存じでしょう。高橋さんはこれほど歌えるテノールはいないのではという人材です。単に歌うだけじゃなくてテクニックから何から全てすごい。「ピーター・グライムズ」のときに英国から来場したブリテン財団の理事長が、「ブリテンのほかのオペラもやってくれないか」といったとき、「テノールの人材が…」と僕がこたえたら、「淳（高橋さん）がいるじゃないか」と言われました。英国人から名前が出るほど有名なソリストなのです。前半は「イタリア」です。生誕200年の記念の年だということで、メンデルスゾーンの何かを入れたいと考えたとき、高関さんからこの改訂版を提案いただきました。実は「イタリア」はロンドンで初演の後、メンデルスゾーン自身が手を入れたくなったのです。でも楽譜はロンドンに置いてあった。それで思い出しながら書いてみたらほとんど一緒だけど少し違ってしまった、というものです。１楽章はそのままで、２・３楽章も普通に聴いているとちょっとしか違わない。４楽章だけは明らかに改訂されて大きくなっているようです。譜面に関して日本の指揮者で一番詳しい高関さんならではですね。違いを聴衆の皆さんが聴き分けて楽しんでいただけるか、という定期です。

■第521回定期演奏会
９月18日(金)19：00
19日(土)15：00
指揮：尾高忠明（音楽監督）
ピアノ：アンドレア・ルケシーニ
曲目：モーツァルト／ピアノ協奏曲第24番
ブルックナー／交響曲第５番

９月です。

僕はブルックナーの交響曲は７・８・９番ばかり振っていました。今年２月の定期で振った４番も自身では17年ぶりでしたね。７・８・９番の凄さを知ってしまってからなんとなく他のはやらなくなっていました、というのも７・８・９番は明らかに神がかっているものですから。でも、最近日本のオーケストラはブルックナーを演奏する機会が減ってきているのですね。外国からいらした指揮者がとりあげることはあっても、日本の指揮者は減っているのだと思います。そういう事から考えても、僕が７・８・９番ばかりというのもいけないと思いますし、それに改めて他のものも勉強してみるとやはりとてもすばらしい。今回４番を練習してみて、ブルックナーの人生観というものを感じさせてくれるところが本当にすごいなあと感じました。７番以降は神さまの領域ですが、若いころの作品にはその天国の高みまで行こうというところが感じられます。実は５番は僕、生まれてはじめてなのです。とても好きな曲なのですが、あまりに凄い曲なのでとりあげてきませんでした。凄いというのは、そこに宗教があるからです。４番は「ロマンティック」というタイトルが示すとおりとても自然ですよね。アルプスの風景を想わせるところもあるし、自然な人間の歌も巡礼の歌もある。対して５番は、最初からバッハ風な宗教観が現われて、そこにブルックナーの個性というものが堂々と真正面から出てくる作品です。かなりの根性がないと振れない骨太の音楽であり、そこに挑戦したいと思っています。ブルックナーをプログラムする時に、よくバッハからブルックナー、メシアンからブルックナーという組み合わせがあります。バッハやメシアンの作品にある宗教からブルックナーにつなげて、というのを皆さんおやりになるのですが、僕にはちょっと重苦しくなりすぎてしまう、そこで、僕はブルックナーの前にはよくモーツァルトの作品を組み合わせます。オーストリアの生んだ二大天才作曲家であって、２人はザルツブルクとリンツというすぐそばの街に住んでいました。そういう意味で繋がりも良いと感じるのです。今回組み合わせたピアノ協奏曲24番はモーツァルトの中では一番男らしい曲ですよね。強いコンチェルトであり調性的にも合うので良いのではないかと考えています。モーツァルトは、先ほどお話ししたようにプラハを気に入っていた、でもすごく楽しんだのはイタリアの演奏旅行でした。当時、音楽界はイタリア中心でしたし、モーツァルトは明るいっていうことをすごく喜んでいたといいます。たしかに、いまでも国境を渡ってイタリアに入ったとたんに青空が素晴らしくなるんです。イタリアに憧れたそんなモーツァルトの作品をイタリア・フィレンツェ生まれのルケシーニさんがどう弾いてくださるのか。ルケシーニさんとは初共演ですが、演奏は聴いていてとても音がきれいな人です。1965年生まれで40代半ばですから年齢的にも

ちょうどよい頃なのではないでしょうか。

■第522回定期演奏会
10月16日(金)19：00
17日(土)15：00
指揮：ゲルハルト・ボッセ
曲目：メンデルスゾーン／
序曲「静かな海と楽しい航海」
ハイドン／
交響曲第101番「時計」
ベートーヴェン／
交響曲第７番

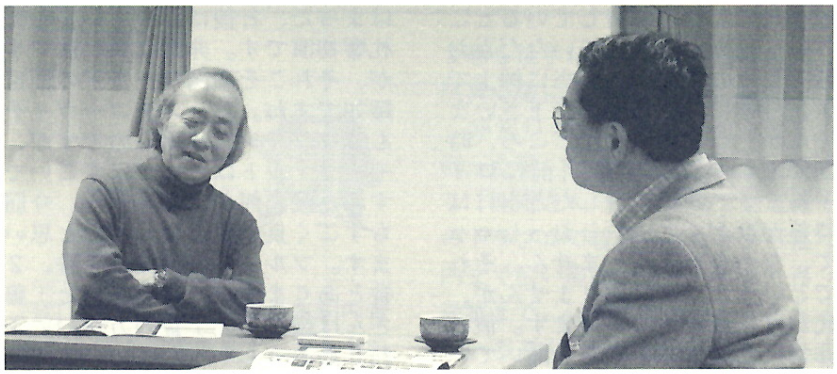
10月、ボッセさんの登場です。

日本での評価としては、エリシュカさんはまさにこれからという方ですが、ボッセさんはもう完璧に定着していますよね、どこのオケに行っても「神様」ということになっています。練習は厳しくて、大変だけどボッセさんが振ってくださるならと楽員もついていきます。ご高齢なのですが、練習や本番になるとかくしゃくとされて未だに若々しい方です。この時のプログラムは、なんと“のだめ”で人気のベートーヴェン７番です。でもボッセさんがやればこれも正調の７番で間違いないですよね。僕も高関さんもここで何度も７番を演奏していますが、それとは全然違う’ドイツの書体’のベートーヴェンをやってくださると思います。そして、僕がちょっと悔しいのはこのメンデルスゾーンの「静かな海と楽しい航海」が入っていること、すごくいい曲で、本当は僕がこれをやりたかった。だけど、マエストロがこれとおっしゃるのなら先生に勝るものは無いのだから是非お願いしようと思いました。

■第523回定期演奏会
11月13日(金)19：00
14日(土)15：00
指揮：尾高忠明（音楽監督）
チェロ：ガイ・ジョンストン
曲目：エルガー／
序曲「フロワッサール」
チェロ協奏曲
エニグマ変奏曲

11月は、またかというお感じになる方もいるかもしれませんが、エルガーです。

僕はエルガーならいずれオラトリオを合唱団と共にとり組んでいきたいと思っているのです。ただそこに至る前に、一度も札響では僕が指揮していない「エニグマ変奏曲」を、札響は他の指揮者で２回程演奏してはいますが、やはり僕と一度やりましょうよということでとりあげます。アンコールでたびたび演奏するとても美しい「ニムロッド」という曲がありますが、この「エニグマ」の中の１曲です。序曲「フロワッサール」は本当にかっこいい、オープニングならこれが一番カッコイイねと英国人が言う曲です。日本ではほとんど知られていない曲ですが、日本でいう「フィンランディア」のように、英国ではこの曲が人気ですね。短いのですけど、エルガーのとてもいい面が出ています。人気のチェロ・コンチェルトでソリストを務めるガイ・ジョンストン君は、スティーヴン・イッサーリスやラルフ・キルシュバウムとかに習っている。この英国のチェロ群というのは世界的にも物凄く評価が高いですね、その人たちに師事し、彼らが太鼓判を押した期待の若手です。以前、芸大が彼を招聘して、その演奏を聴いた皆が素晴らしいと言って推薦してくれました。今回はフレッシュなエルガーが聴けるのではないでしょうか。



■第524回定期演奏会
12月11日(金)19：00
12日(土)15：00
指揮：広上淳一
ピアノ：ニコライ・ルガンスキー
曲目：ショスタコーヴィチ／
交響詩「十月革命」
ラフマニノフ／
ピアノ協奏曲第２番
ストラヴィンスキー／
バレエ音楽「火の鳥」

12月です。

広上君は僕と芸大での仕事仲間ですし、ご自身が教える東京音大に僕を呼んでくれたり、という仲間です。実は兄貴（尾高惇忠氏）のお弟子さんでもあり、僕の高校の後輩でもあるわけで、すごく長い付き合いです。彼を尊敬してるんです。いまのように立派に成られても若い頃のパッションを未だに持ち続けている。また、教えている学校の為ならと懸命に取り組まれる、教育熱心で後輩思いの方です。今回のプログラム「火の鳥」全曲については、思い出があります。岩城先生が何度も演奏されており、そして札響で最後に指揮されたのもこの曲でした。岩城先生のストラヴィンスキーは小澤先生と双璧のすごさでした。バトンテクニックも完璧で、あんな完璧な人たちはその後出ていない。それでいてお二人から出てくる音楽はまるで違うのですが、そこが面白いところでしたね。それが、あの最後の岩城先生の「火の鳥」では全ての無駄な力が抜けていた、まるで「白鳥の歌」でしたね。素晴らしかった。僕にとっても、きっとお客さまにとっても思いの残る作品ですが、広上さんなら全然違う面を出してくれるだろうと期待しています。ラフマニノフのピアノ協奏曲第２番、ルガンスキーはもう有名な男でとても素晴らしいので、いうことはありませんね。

■第525回定期演奏会
１月29日(金)19：00
30日(土)15：00
指揮：ジョセフ・ウォルフ
ヴァイオリン：ヴィヴィアン・ハーグナー
曲目：ベルリオーズ／
序曲「海賊」
メンデルスゾーン／
ヴァイオリン協奏曲
シベリウス／
交響曲第２番

１月ですが、非常にオーソドクスなプログラムになっています。

指揮のジョセフ・ウォルフさんは、コリン・デイヴィスさんの息子さんですね。お父上は本当に素

敵な人でした。練習しているところを２回ほど聴かせていただきお話もしたのですが、本当に紳士です。日本に「振りに来て下さいませんか」とお願いしたところ、時間が取れないですし、「前にロイヤル・オペラで来日したときには時差がひどくて…」とおっしゃって、なかなか実現しません。それでというわけではありませんが、代わりに息子さんが来ます。彼は非常に素直な棒を振ると聞いています。若い人なので、現代や近代のものはどうかと初めは打診したのですが、意外にオーソドックスでクラシックなレパートリーで評価を得ている。それで、こういうものにしましょうと決めました。シベリウスの交響曲２番は大変な名作ですが、最近新しい版が出ていてこれまでの楽譜の間違いが結構直ってきています。多分、彼も新しい版で演奏されるのではないかなと思っています。最初に演奏するベルリオーズの「海賊」というのも面白い曲です。

■第526回定期演奏会
２月26日(金)19：00
27日(土)15：00
指揮：高関　健（正指揮者）
フルート：工藤重典
曲目：モーツァルト／
フルート協奏曲第１番
ショスタコーヴィチ／
交響曲第８番

２月は高関さん。

ショスタコーヴィチの８番を僕はすごく若い時に聴きました。凄いなとは思ったけど、指揮しようとはなかなか思えなかった曲です。先日高関さんにこの曲について話を聞きました。世界のいろんなコンクールを受けに行っていた頃に、当時のソ連の人も来ていて彼らはみんな「ショスタコーヴィチなら８番が一番いいぞ」と言っていたと、それから凄い曲だとわかり、興味をもつうちにだんだんとはまった、と彼は言っていました。札響初演です。非常に長い曲ですが、それこそ高関ワールドの面目躍如ですね。ショスタコーヴィチもカップリングに困るのですが、モーツァルトはさすがにすごいですね、後に何がきても合う。今回もすごく良い組み合わせだと思います。フルート協奏曲は１番、２番とありますが、高関さんと工藤さんは揃って「１番の方がいいよね」とおっしゃったといいます。工藤さんは高関さんと大学の同窓、同級生です。それでいて協演は初めて。これが卒業後初めて同じ舞台に立つという画期的なことです。

■第527回定期演奏会
３月19日(金)19：00
20日(土)15：00
指揮：尾高忠明（音楽監督）
曲目：三善　晃／交響三章
ラフマニノフ／
交響曲第２番

このシーズンの最後になる３月は、まず三善晃先生の「交響三章」です。

僕は三善先生の曲もいっぱい初演していますが、武満先生が天才であったなら、三善先生は鬼才ですね。その先生の出世作が「交響三章」になります。この作品は、日本フィルハーモニーが毎年邦人作曲家に委嘱していたシリーズの２、３作目のものになりますね。シリーズの中で傑作はと聞かれたら全員が「交響三章」と答える、それくらいの名曲です。この「交響三章」には日本人の作曲家の多くが影響を受けました。出てくる音形がその後のいろいろな人の作品で使われているのです。そんなに長い曲じゃないけど、内容が一瞬たりとして流すところは無いという密度の濃い作品となっています。でも再演されない、それはもう超絶技巧で難しいからです。今年１月定期の伊福部さんの作品も難しかったようですが、自分の知っている範囲ではこの曲が一番難しいです。オーケストラのアンサンブルも難しいし、ひとりひとりが音を出すのも難しいし、指揮するのも難しいし、なのに聴いている人は面白いんです。実は去年の10月に日本フィルでも演奏しました。その日はこの「交響三章」のときが一番盛り上がっていました。静かに終わる曲なのに、皆さんが燃えていましたね。楽員も泣いていました、自分たちが委嘱した曲がこんな凄い曲だったのだ、と。札響も日本の作品をもう少し定期演奏会ではとり入れなくてはいけないのに、このシーズンは全然入っていませんでした。だから、最後に節目としてこの「交響三章」を入れました。きっと練習は大変ですが、難しいといっていつまでも演奏しないわけにはいかないのです。こんなに難しくてこんなに面白い曲はないですよ。後半のラフマニノフの２番は、定期としては５年ぶりの再演になります。近い将来は３番にも是非取り組みたいと思っています。

最近の札響は新しい楽員も増えて、特にヴァイオリンの人数もようやく増えたので、少しずつ大きな音が出るようになってきました。十数年前の音量とはまるで違います。あの頃では、この年間シリーズは出来なかったと思いますね。いくらショスタコーヴィチだ、ブルックナーだといっても、本当に目指す音にはならなかった。だから、このプログラムをみてそこまでのオーケストラになって来たのかなという思いはあります。札響は、弦がきれいだとかヨーロッパ的とかいわれますが、決してヨーロッパ的ではない。ここの風土とか街の持っているカラーなどの影響を受けているわけで、札響の音色のきれいさは、悪い意味ではなく淡白というか墨絵のようなのです。だから、昨秋の東京公演で「タリス」の頭の音を聴いて、「参った、あんな音は俺たちには出せない」といった東京のオケの楽員がいっぱいいました。でも、それは少し賛辞が行き過ぎていますね、さらに上があることを認識し、もっともっと純度を高く、そしてもっともっと弦も鳴らさなくてはならない。弦がもっと鳴ってくると管の吹き方もまた変わってくるのですよ。オーケストラの奥の深さっていうのは本当に、追い求めればどこまでも続きますから、時間をかけて、弦も管も音量もまだまだ上を目指していかなくてはならないのです。

（2009.2.4　キタラにて
聞き手　深井雅昭、松尾英樹）

札響物語 45

（500回定期をめぐって）

『停電』（その２）

最初の停電は秋田県民会館で1966年10月27日の「新世界交響曲」の演奏中に経験したものでした。原因は近くの電柱に自動車が衝突して電柱が折れて停電しものですが、２度目の停電はそれからちょうど10年後の1976年10月24日のことでした。

札響は文化庁主催事業（移動芸術祭、青少年芸術劇場、こども芸術祭、本物の総合芸術体験事業など）に200回も出演しています。創立20周年直前までは全てオペラ公演のオーケストラを務め、その大半は道外公演でした。

1976年10月にロッシーニの歌劇「セヴィリアの理髪師」が文化庁移動芸術祭として留萌市、苫小牧市、函館市、青森県八戸市、岩手県盛岡市、宮城県北上市、福島県会津若松市、群馬県館林市の８市で行われました。指揮：飯守泰次郎、出演：二期会、管弦楽：札幌交響楽団でした。10月25日の留萌市公演が初日なので札響は22日（金）、23日（土）に札幌の真駒内青少年会館で飯守氏とオーケストラ練習を行い24日（日）15時から20時まで留萌市文化センターでドレスリハーサルのスケジュールでした。主役級のキャストがダブルため練習時間は５時間を予定されていました。

24日14時前後には、楽団員が三々五々留萌市文化センターに集合しました。その頃はまだ雨は降っていなかったのですがリハーサルが始った頃から小雨が降り始め、午後のリハーサルが終わって休憩の頃には風が出始めました。風は西北西の日本海側からで徐々に激しくなっていました。主催者が用意してくれた弁当をつつきながら全員が音を立て始めた窓の外を眺めて「嵐になるのかなー」などと話していました。１時間の休憩の後再びリハーサルが始まったのですがホールの中ではさすがに全く外の気配は感じられずリハーサルは順調に進んでいました。第２幕も後半に入ろうという時に突然真っ暗になったのです。間もなく非常灯が点灯され、20分近く経った頃、会館の職員からどうやら「北電さんからの連絡で送電線のトラブルで留萌の当たりから稚内まで広い範囲が停電しており再送電までには相当時間がかかるらしいのです。非常灯の燃料もあとわずかで10分も持たないだろうと思いますが」と舞台監督に話がありました。舞台上には大道具がセットしてあり楽屋回りには小道具、鬘、メイク、靴などがところ狭しと広げられてある、オーケストラ・ピットには高価な楽器や譜面台があり、足元には譜面灯のコードが這い回っているので灯りがなくなった時は危険が大き過ぎるため急遽身の回りを片付けてホテルへ引き上げることにしました。リハーサルは中止し、翌日のリハーサルを１時間増やすことになりました。送電線のトラブルは強い風のために海水が送電線に吹き付けられてショートした塩害によるものでした。翌日は風も雨も弱まってリハーサル・本番を無事に終了しツアーに出発したのでした。

（竹津宜男）

札響に新しい仲間が加わりました

前号でもお伝えした通り、昨年暮れから新メンバーの加入が続いていますが、１月と３月にも新たに２名の方が入団されました。お名前と簡単な経歴を皆さんに知らせします。顔と名前を覚え、力いっぱい応援しましょう。

岡部亜希子（おかべ あきこ）（ヴァイオリン）

１月１日入団

東京藝術大学附属高等学校を経て東京藝術大学を卒業。第９回コンセール・マロニエ21弦楽部門３位。第７回フォーバルスカラシップ・ストラディヴァリウスコンクール入賞。第19回和歌山音楽コンクール弦楽部門１位。大学内のモーニングコンサートにて、藝大フィルハーモニアと共演。第33回、34回藝大室内楽定期演奏会に出演。第38回JTが育てるアンサンブルシリーズに出演。フェルメールクァルテット、ジュリアード弦楽四重奏団の公開レッスンを受講。2007～08年、NHK交響楽団アカデミー生。

これまでにヴァイオリンを鷲見健彰、鷲見野富子、澤和樹、若林暢、玉井菜採の各氏に師事。

多川　智子（たがわ ともこ）（ヴァイオリン）

３月１日入団

４歳よりヴァイオリンを始め、第48回全日本学生音楽コンクール大阪大会小学生の部で第１位。第50回同コンクール中学校の部第２位。京都・愛知子どものための音楽コンクール金賞、第９回神戸国際学生コンクール優秀賞。大阪モーツァルトアンサンブルとベートーヴェンの協奏曲を共演。東京芸術大学附属高校を経て東京芸術大学を卒業。ドイツ国立マンハイム音楽大学を最高得点を得て卒業。

これまでに松田淳一、小杉博英、浦川宣也、景山誠治、ローマン・ノーデルの各氏に師事。

Player's talk 1

ヴァイオリン
横井（よこい）　慎吾（しんご）

———ご出身は

石狩市花畔です。地元です。7つ上の兄が小学生の頃ヴァイオリンを習い始めて、それを見て「僕もやりたい」と自分から言って6歳から始めました。当時の花畔は田舎で、ピアノを習っている人は何人かいましたが、ヴァイオリンを習っている人はいなかったです。小さい頃は、ヴァイオリンのケースを持って歩くのが恥かしくて、風呂敷で包んで、兄と2人でバスに乗って札幌まで習いに来ていました。札響でヴィオラの首席をなさっていた北本和彦先生についていましたが、遊びざかりで練習もしないで行くものですから、先生からよく叱られていました。中学生になってからは少し真面目に練習し、一番伸びたのは高校生の頃だと思います。

———大学時代は

僕は北星大学の経済学部に入学しましたが、畑違いの大学から札響に入ったのは僕が最後じゃないですかね。実は高校3年のときに、札響にエキストラで出ています。「第9」の演奏会でした。兄が札響でヴィオラを弾いていましたし、知っている人も何人かいたのですが、初めての大舞台でとても緊張しました。それからたびたびエキストラで呼んでもらいましたが、大学1・2年の頃は勉強が忙しくてあまり回数は行けませんでした。クルト・ウェスさんの指揮で初めて第110回札響定期演奏会に出た時のことは印象深いです。「運命」を演奏したのですが、初めての外国人の指揮者で頭が真っ白になりました。大学4年の時には、札響がオペラで沖縄まで行く公演があって、それに同行させてもらいました。団員さん達と一緒に旅行できて楽しかったです。卒業の時に札響のオーディションを受けて、落ちてももう1年は頑張ろうと思っていたのですが、オーディション後に常任指揮者シュバルツさんが両手で丸印を出してくれました。

———札響に入団したわけですが

弾く事に精一杯で、勉強しても余裕はなかったです。3年くらいは色々な曲を経験するのに必死でした。当時は音楽教室が多く、同じ事の繰り返しでマンネリ化した時期がありました。その時にカルテットを始めてアンサンブルの難しさや音楽の楽しさなどがわかってオーケストラも面白くなってきました。

———思い出に残る指揮者は

現音楽監督の尾高氏を始め、秋山氏、小澤氏、コシュラ氏など思い出は沢山ありますが、特に思い出に残る指揮者は私が入団当初常任指揮者だったシュバルツさんと岩城さんですね。シュバルツさんは妥協を許さない厳格な方で、練習は怖かったですね。ご自身もチェロ奏者だったので、練習後にチェロを弾かれることもありすごく良い音がしていました。そして、今自分があるのは岩城さんの存在が大きかったと思います。練習中に1プルトや男女に分けて弾かされたりするのです。特に1人で弾くのは嫌でしたね。厳しい指導もされました。それなら全部暗譜してどんな指揮にもついていくぞと思いながら練習していました。音大を出ていない自分にとって和声などわからない部分を教えてもらったのも岩城さんです。何年かコンマスがいない時代があり、たくさんの客演コンマスの横で弾いていたので自分の技術も上がり色々な指揮者とのコミュニケーションがとれて、とても勉強になりました。

———札響は弦が綺麗だと言われますが

その基礎を作ったのは岩城さんだと思います。僕はあまり現代作品が好きじゃなかったのですが、武満さんの曲をやりだしてから武満トーンにはまり、その考えは変わりました。東宝映画「乱」の録音では岩城氏、武満氏、黒澤監督、オーケストラが一体となったのが印象に残っています。

———お好きな曲はどんな曲ですか

たくさんあって一概には言えませんが、ベートーヴェンは好きですね。15年くらい前に札響のメンバーでカルテットを組んでベートーヴェンの弦楽四重奏全曲を演奏しました。特に後期のものは難しいですけれど、聞けば聞くほど弾けば弾くほど良いです。「第9」も毎年何度も弾いていますが面白くて力が入ります。

———ご趣味をお聞かせください。

ゴルフをしています。今は「札響ゴルフクラブ」で会長をしていて、OBの方を含めて、4、5組で年7回コースを回ります。4月初めには今年の年間スケジュールが決まりますが、札響くらぶ会員の方でゴルフをされる方がいましたら、声をかけて下さい。また、最近腰痛がひどく、温めると良いみたいなので温泉によく行くようになりました。暇を見つけては家族で行ったりしています。

———札響くらぶに一言お願いします

1996年8月に発足し以来、会長上田氏をはじめ多くの方々にお世話になり感謝しております。皆様の存在がなければ札響は成り立たないと思っています。声をかけてもらえれば親近感もわくし、身近に感じられるので、気軽に声をかけて下さい。これからもよろしくお願いします。

（中山正治、松尾英樹）

Player's talk 2

打楽器
真貝（しんがい） 裕司（ゆうじ）

―――ご出身は

1951年新潟県長岡市生まれです。小学校入学前に父の転勤で室蘭に引っ越して来ました。だから、北海道育ちです。小学校では絵が好きだったので最初美術クラブに入ったのですが、先生の勧めで器楽クラブに入りました。そこでいろいろな楽器に出会うことができました。その後、鼓笛隊に入りました。ほんとうは打楽器をやりたかったのですが、なぜか縦笛を吹いていました。室蘭港北中学校では吹奏楽部に入りテナーホルンを吹きました。ジュニアオーケストラでは初めて打楽器をやりました。室蘭栄高校ではやはり吹奏楽部に入り、本格的に打楽器を始めました。たまに指揮もしました。中学と高校では朝から練習をし、授業が終わるとまた夕方遅くまで練習で吹奏楽に明け暮れており、典型的な吹奏楽人間でした。

―――音楽大学を目指そうとしたのは

高校は進学校でしたので、親は理系の大学に行くように望んでいましたが、吹奏楽が好きでどうしても音楽をやりたかったので親の反対を押し切り、説得して音楽大学受験を目指しました。最初はNHK交響楽団打楽器奏者の小林美隆先生のレッスンを受けに東京に通いました。その後、先生の紹介で札響の吉岡幹雄先生の所にもレッスンに通いました。それで、武蔵野音楽大学に入学しました。大学は打楽器専攻で入りましたが、すごく楽しかったですね。その当時、学校にはオーケストラがたくさんありまして、学校全体のAオケ、2年生だけのオーケストラのBオケ、で、僕が入って1年生だけのオケをつくろうということでCオケ、そのほかに夜間の二部オケというのもあったんですね。それで僕は全部のオーケストラを掛持ちしました。いろいろ経験できて楽しかったです。それでオケが好きになり、どうしてもオケに入団したくなりました。さらに、音大の3・4年になると、東京のオケにエキストラでいく機会があるんですね。それに呼ばれて緊張しながらやるんですが凄く勉強にもなって。丁度、僕が卒業するときに札響のオーディションがあったんです。運よく欠員があったんですね。卒業は3月でしたが、入団は3月1日でしたから、卒業より早くに入団しました。

―――札響に入団したわけですが

プロとしては、毎日毎日が緊張の連続で。当時、打楽器は3人だったんです。だから、いろんな楽器をやらなきゃならなくて。最初は小物楽器、小太鼓とか鍵盤楽器など。15年間くらいは小太鼓を中心とした小物打楽器、あらゆる打楽器をやりましたね。その後、首席制度が出来て首席になりティンパニをやるようになりました。ティンパニ奏者はティンパニだけなんですよ。で、それをまた15年やりました。それで、ティンパニをやめてからは、大太鼓やシンバルといった大物打楽器を。今は、シンバルを中心にやっています。ですから札響ではいろんな打楽器をやって、一つ一つの打楽器を追求することが出来て良かったなと思っています。ティンパニの時はマレットを手作りしました。硬さや重さなど、その曲に合ったものを作ります。バチ作りをまとめたノートが一冊あります。今はシンバルで、マイシンバルを4組持っています。大きさが全部違います。世界的奏者のボブ・ベッカーさんと共演する機会がありまして、彼はシンバルのスペシャリストなんです。彼にお願いしたところ、4組のシンバルを送ってくれました。カナダのセイビアンという工場のものです。中にはセイビアン工場で7・8組しか作らなかったというレア物もあって、すごく気に入っています。いつもピカピカにしていますよ。子供たちに教えるときは「腕もシンバルも磨け。」と、いつも言っています。

―――カスタネットのお話を

カスタネットは好きな楽器なんですが、なぜカスタネットかというと、大学のときに習った読売日本交響楽団の市岡史郎先生が「Mr.カスタネット」と呼ばれるくらいカスタネットの名人だったんですね。それで、私は先生の一番弟子で最初のレッスンのときにこれは凄いと感じてやり始めまして、今に至ってるんですね。フラメンコで使うカスタネットを僕も使ってるんですが、奏法もフラメンコと同じなんですね。でも、その奏法というのはあまり知れ渡っていなくて、オーケストラでカスタネットが出てくる場面でその指を使った奏法をすると非常にいいニュアンスが出て、素晴らしいリズムがたたけるので、絶対オーケストラでもやらなくちゃと。でも、マスターするのが大変でした。それが発展してソロにまでなりました。カスタネット協会を作ったりして。カスタネットの曲がないものですから、僕が自分で作るんですね。曲を聴いてアドリブで入れながら、ソロにしちゃう。カスタネットの曲を作曲家に依頼して作ってもらうということもやってます。2011年に協会が10周年になるので、記念にカスタネット協奏曲を作曲家の今井重幸さんに依頼しています。東京と札幌で初演できればと思っています。オーケストラ伴奏です。詳しくはホームページ「カスタネットワールド（http://www5c.biglobe.ne.jp/~castanet/）」でお知らせしますので見てください。

―――ご趣味をお聞かせください。

ゴルフをよくやりますね。今はゴルフスクールでプロの先生についてやっています。今、冬ですが室内に通っています。力を抜いて振るっていうのが難しいですね。打楽器を教えるときは「力を抜け」とよく生徒には言ってるんですけどね。打楽器のときは出来るんですが、ゴルフだと思いっきり力が入って。そのへんが、課題ですね。楽しいですし、健康にもいいと思います。それと、まとまった休みがあると、かみさんと二人で旅行に行くのが好きですね。もう少ししたら、花見で本州に行こうとか。後は、最近ビデオカメラと大容量のパソコンを購入しましたので、これからいろいろと活躍しそうです。

―――札響くらぶに一言お願いします

札響くらぶのようなすばらしいファンの集まりがあって、とても幸せだと思います。皆さんに応援してもらって、聴きに来てもらって、それで演奏も盛り上がるし、発展してゆく原動力になっていると思います。これからも応援よろしくお願いいたします。

（中山正治、松尾英樹）

from 札響くらぶ

札響くらぶコンサートが復活!!

札響くらぶコンサートは、もともと開催経費を最低限に絞り込む工夫をしながら、会員によるチケット販売という実践活動を通じて、音楽に係わる部活動に参加している高校生などを招待し、キタラで札響の演奏を聴いてもらい、将来札響を支えるリスナーになってもらいたい、そして札響を共に聴く喜びを感じ合うことによって、札響くらぶの仲間づくりになる、そんな思いを込めて開催してきました。

しかし、札響くらぶが政策提案してきた札幌市内の小学6年生全員に札響をキタラで聴かせることが2004年『Kitaraファーストコンサート』として実現し、また、札響が財政的に厳しいことが表面化するなど、これまで同様に開催することが厳しくなり、新たなコンセプトのコンサートを模索するため、2005年の第7回コンサートを最後に一時休止することになりました。

札響くらぶ創立10周年を迎えた2006年、次の10年の活動目標となる「札響くらぶビジョン」策定のなかでもコンサートの在り方などが検討され、「札響くらぶコンサートは、会員にとっても重要と思う。定期会員ばかりが札幌交響楽団ファンではない。様々な人もいる。今までの札響くらぶコンサートには楽しみがあった。札響くらぶの会員にとって特典になるコンサートがあってもよいと思う。」と、札響くらぶコンサートの必要性が報告され、復活に向けて動きだしました。

「札響くらぶコンサート」は札響くらぶにとって活動の基本であることから、コンサートの対象をこれまでの青少年から団塊の世代の大人を対象にしたものに転換することで札響との協議がまとまり、本年8月9日（日曜日）に第8回札響くらぶコンサートとして復活することになりました。

コンサートの概要は次のとおりです。

日時／8月9日(日)午後2：20開場、3：00開演
会場／札幌コンサートホール・Kitara大ホール
指揮とお話／飯森範親（山形交響楽団音楽監督）
プログラム
第1部　管楽器が活躍する曲
オープニング
J. シュトラウス／「こうもり」序曲
作曲者、曲名当てクイズ
会場の中から正解者（各曲1名）に記念品プレゼント
＝休憩＝
第2部
ドヴォルジャーク／交響曲第9番「新世界より」

なお、終演後（午後5：00予定）に交流会の開催を予定しております。

お便りをいただきました

N響定期にエリシュカさんが登場！

本日NHKホールにて行われたN響定期演奏会に行ってきました。評判のエリシュカさんがいよいよN響にデビューしたのです。曲目はスメタナの「我が祖国」全曲でした。

前半の3曲はN響の乗り具合もいまいちでしたが、後半に入りエリシュカさんの音楽性が浸透し始めたのか、リズムにも生気が生まれ出し、N響にしてはめずらしい腰の入った好演になりました。高齢化の著しいN響会員にも好評だったようで異例なカーテンコールが長く続きました。楽員たちもウマが合ったようで和気あいあいとした終演でした。こんなわけで大成功のN響のデビューを飾ったことを報告するとともに、エリシュカさんをN響に強奪されないよう皆さんの御健闘をお祈りする次第です。

（さいたま・札響くらぶ会員）

意見・感想をお寄せ下さい

会員の皆さんからの投稿をお待ちします。内容は問いませんが、以下の項目に関してのご意見を特にお待ちしています。

① 『札響くらぶコンサート』で演奏してもらいたい曲目、またはオリジナルな企画
② 札響くらぶ主催でやってもらいたいイベント
③ 現在札響くらぶでやっているイベントの改良点
④ 会報に取り上げてもらいたい記事

特に投稿の期限はありませんが、4月30日までに投稿してくださった方の中から、抽選でプレゼントを差し上げます。なお、当選は商品の発送をもってかえさせていただきます。

プレゼント商品
① 5月の札響定期演奏会のS席チケット（3名様）（座席の指定はできません）
② 横井愼吾さんのサイン入り色紙（2名様）
③ 真貝裕司さんのサイン入り色紙（2名様）

投稿は、ハガキ、封書またはE－メールでお送り下さい。なお、その際必須事項を必ずお書き下さい。

必須事項
住所・氏名・会員番号・希望のプレゼント商品の番号。なお、匿名希望の方は、「匿名希望」または「ペンネーム」をお書き下さい。（あて先は会報の題字の下にあります）

編集後記

いよいよ、札響くらぶコンサートの復活に向けて、本格的活動が始動しました。会場の確保や指揮者、曲目の選定など、かつてのコンサートを経験していないスタッフも多く、頭を悩ませながらの取り組みです。ようやくコンサートの骨組みが決まり、来月には会員の皆様への案内、チケット販売のお知らせをお届けできるかと思います。もうしばらく、お待ち下さい。少ないスタッフでの活動で行き届かない点もありますが、皆様のご協力を是非お願いいたします。また、スタッフへの参加もお待ちしています。

さて、尾高音楽監督に来期の聴きどころをお話していただきました。尾高音楽監督の熱い思いが本紙を通して伝われば、嬉しく思います。

（松尾英樹）